

令和3年度
一般入学試験（A方式）問題

国語

（60分100点満点）

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 開始前に解答用紙に受験番号、出身中学校名、氏名を記入して下さい。また、受験番号は算用数字を用いなさい。
3. ページのないものや、文字の薄い場合は監督者に申し出なさい。
4. 解答は、解答用紙の解答欄に記入して下さい。
5. 使用できる用具
 - ①黒鉛筆（万年筆、ボールペンは使用しないこと）
 - ②鉛筆けずり
 - ③消しゴム

第一問 次の文章1、2を読んで後の問いに答えなさい。文章1は筑紫哲也のエッセー『スローライフ』（二〇〇六年刊行）の一節、文

章2は石川英輔の小説『大江戸神仙伝』（一九七九年刊行）の一節であり、いずれも出題の都合により文章を改めている。

なお、文章1では、はじめに、冒頭部分の詩と俳句の作り手である詩人の室生犀星と歌人の石川啄木についてまず言及している。また、文章2は、製薬会社の元研究員（私）が江戸時代の文政五年にタイムスリップするというストーリー中の一場面である。

文章1

ふるさとは遠きにありて思ふもの

そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土の乞食かたとなるとも

帰るところにあるまじや

室生犀星むろせいせい

□ ふるさとの山に向かひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

□ ふるさとの訛りなつかし

停車場の人ごみの中に

そを聴きに行く

石川啄木いしかわたくぼく

己の故郷とどう対するか。

文人で言えば、犀星と啄木とをそれぞれの極みとして、この両極の間に普通の人たちは漂っているのではないかと思う。

心情としてはそうであっても、戦後の高度経済成長期の「ゲキヘン」で郷土がすっかり変貌してしまい、故郷そのものが失われてしまった人たち、あるいは生まれた時から「キヨウリ」と呼ぶべきものを持たない「都市流民」となった場合は別だが。

犀星は文人たらしめとして故郷を捨て上京するのだが、貧乏にあえぎ、キヨウリの金沢に何度も舞い戻っている。そうであればなおさら「帰るところではない」という苦渋が深まる。否定すべき過去としての故郷がそこに在る。

同じく上京してどん底の生活を味わった啄木はしかし、手放しに近いキヨウリへの憧憬、愛慕をうたい続ける。せめてふるさとの訛りだけでも聴きたいと、岩手の人たちの上京の玄関口、上野駅にまで出かける。

私自身を振り返っても、^①この両極の間を揺れて来たと思う。

若いころは「犀星型」の傾向が強く、年齢を重ねることに「啄木型」に近づいていった。

「里心」が起きるといふ。それに近い心境だろう。が、曲折はあった。

小、中、高校、みな入った所と出た所が違う、々々、々々、校生ではあるが、私の先祖が何代も生き、私自身も小学校（当時国民学校と言った）三年生の終わりから卒業まで住んだ地が私の故郷であることは疑いない。

大分県日田郡小野村というのが当時の地名だったが「昭和の大合併」で同県日田市に併合され現在に至っている。

九州のへそのような位置に在る日田盆地そのものが山間の地だが、その住人すらが、私の（旧）村について「山奥の田舎だ」と嗤う。こういうのを「目糞、鼻糞を嗤う」と言うのだが、山谷に沿って細長く住家が分布する山里である。

辺鄙で貧しいうえに、地縁、血縁が濃密で人間関係の「湿気」が高いことを幼いながら肌身で感じていた私にとって、そこは振り返りたい地ではなかった。むしろ、そこから逃れたからには、忘れ去りたいという思いのほうが強かった。それに、敗戦の灰燼から立ち直ろうとしていたこの国全体が、前方ばかりをみて突き進んでいた時期だった。

長らく顧みることのなかったキヨウリに足が向いたのは中年にさしかかってからだだった。

故郷はほとんど何も変わっていなかった。

久しぶりに帰郷すると浦島太郎の心境になるほどに変貌へんぼうを遂げてしまったとみなが口を揃そろえるこの列島のなかで、これは稀有けうな幸運だと思った。

私のキョウリでは、夜を徹して議論することを「夜なべ談義」と呼ぶ。

たまたま帰郷した時に、地元の人たちが駅前広場にむしろを敷いて、それをやるのでお前も入れと誘われた。

テーマは「地域の将来」だったと思う。

私はほほ②袋叩たたくきの目に遭あった。

この国の大部分とちがって、自然もたまたま自分の小さいころとほとんど変わっていないことを「ありがたい」と思っていた私は正反対に、彼らは変わりたいと考えていた。

「都会には長い間出稼いせぎに行つた者がたまに帰つて来て、変わらない方がいいなど言うのは勝手もいいとこだ。オレたちはちつたあ変わりたいんだよ」

「ちつたあ」は「少しは」という意味の「ふるさとの訛り」である。

しばらく私の帰郷は途絶えた。

たしかに私の言い分は身勝手だという反省もあったが、だからといって「近代化」した故郷など見たいとも思わなかった。やはり、「遠きとほきとほにありて思ふもの」なのだろう、と心に決めた。

文章2

文政五年＊1の墨田川＊2の水は、清らかに流れている。ごみ一つ浮かんでいない水面をじつと見ながら、いな吉＊3の唄うたを聞いているうちに、私の心の中に江戸＊4に対する③深い愛惜あいせきの情わが湧わいて来た。

私の先祖は、宝曆＊4の頃に、どこか北の方の国から江戸へ出稼いせぎに来て、そのまま住みついてしまったということだ。それから、私の代までの二百年間、ずっと下町に生まれて住み続けてきた。だから、私にとって、故郷と言えば東京の日本橋しかない。先祖＊4を遡さかのぼって

も、よその土地が故郷だったのは、宝暦の昔までのことで、それ以来、江戸と東京から離れたことがないという。

だから、子供の頃、夏休みになると「田舎へ帰る」といつてはしゃいでいた友達が、どれ程羨ましかったことだろう。いや、ずっと小さい頃は、その意味さえわからなかったくらいである。戦争の時も、ソカイ先がなくて両親は非常に苦労したようだった。

そして、今、夢のように美しい大川の景色を見ていると、世界中で、この私の故郷ぐらいいびい扱いを受けた都市はあるまいという気がして来るのだった。それも、戦争で瓦礫の山になっただけなら、世界中にもっとひどい例があるかもしれないが、東京の場合は、そのあとがいけなかった。

あの、高度成長期以後の東京は、都市美とか、居住性などについて話すのさえ罪悪といった感じで、金儲けの道具としてめちやくちやに改造されてしまった。

私の祖父は、あまり懐古趣味のなかった人で、震災前の下町が、いかに狭苦しくごちゃごちゃした街だったかを、何度も話してくれたものだ。私だって、高度成長期以前の東京が美しい街だったなどとは思っていない。

しかし、ここ二十年來の改造には、東京に対する愛情が全くといって良いほど欠けていた。地名の変更にしても、明治以來何度も行われて来たことだが、今回のやり方はまさに血も涙もなかった。(この改造に)うっかり反対でもすると、何とか省の高級官僚がテレビに出演して「カンシヨウ的になるのは止めましょう」などと、お説教してくれる。金儲けの道具なら、カンシヨウも不要だろう。

東京は、新興都市に違いないが、江戸時代から通算すれば四百年の歴史と、それなりの伝統のある土地柄なのだ。ところが、歴史とか伝統などというものは、効率という点から考えれば、ジャマだけの代物に過ぎない。金儲け第一主義なら、さっさと叩き壊すに限るのだ。

叩き壊す役は、東京なんて懐しくもなんともない、どこかよその土地から来た人である。いざとなれば、逃げかえるべき(田舎)のある人達だ。歴代の首相として、東京に選挙区のある人が、どれだけいたのだろう。故郷にいるよりは、東京の方が金になるから出て来ただけのことで、古いものを叩き壊して、もっと効率よく儲ける道具に変えるぐらい、痛くも痒くもないから、何のためらいもありません。

東京がどうなろうと金にさえなれば、自分の(田舎)や選挙区には影響のない点では、都民の大部分は同じようなよそ者である。し

かも、私のような土着民は、江戸時代からの習慣で、お上の決定に対して組織的に反対するのが苦手と来ている。

※1 西暦一八二二年。

※2 東京都を流れる河川。

※3 小説中の登場人物の女性。

※4 江戸時代中期の年号。

※5 ここでは墨田川の下流部のこと。

問一 文章中の傍線部ア～オのカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部①「この両極の間を揺れて来た」とはどういうことか、その説明として最も適当なものを、次のア～オの内から一つ選べ。

- ア 故郷を打ち消したいという気持ちと故郷をかばいたいという気持ちがまじりあっていたということ。
- イ 故郷を苦々しく思う気持ちと故郷にあこがれる気持ちがまじりあって平静さを失っていたということ。
- ウ 故郷を忘れたたいという気持ちと故郷に帰りたいという気持ちのどちらとも定まらないでいたということ。
- エ 故郷に帰りたいという気持ちと故郷をなつかしく思う気持ちとに交互にとらわれていたということ。
- オ 故郷を否定する気持ちと故郷を肯定する気持ちとが時期によってはっきりと変化していたということ。

問三 傍線部②「袋叩きの目に遭った」とはどういうことか、その説明として最も適当なものを、次のア～オの内から一つ選べ。

- ア 郷里の人々によって自分の軽率な意見の盲点が明らかになり集中的に責め立てられたということ。
- イ 郷里の人々の大部分が自分の意見に反対したのでその後帰郷を断念せざるを得なかったということ。
- ウ 地元の人々が自分の正当な意見にまったく聞く耳をもたず精神的に大きな苦痛を受けたということ。
- エ 地元の人々によって自分の意見が身勝手に保守的なものだとなじられ暴言を吐かれたということ。
- オ 郷里の人々によって自分の意見が自分本位で自己中心的なものだと集中的に非難されたということ。

問四

文章1に引用された室生犀星の詩と石川啄木の短歌についてのiからviまでの説明のうち適切なものの組み合わせを、次のア～オの内から一つ選べ。

- i 室生犀星の詩には故郷への憧憬が感じられるものの帰郷への思いを断ち切ろうとする固い意志が読み取られる。
- ii 室生犀星の詩には異郷での生活が極度に貧困したとき以外は故郷には決して帰るまいという決意が感じられる。
- iii 室生犀星の詩は故郷は異郷にあつてこそ価値がでるものなので故郷はすてるべきだという考えが背景にある。
- iv 石川啄木の一首めの短歌(□)には異郷にあつて故郷の風景を夢想する啄木のやるせない哀れな気持ちがかがえる。
- v 石川啄木の一首めの短歌(□)には帰郷して故郷の風景を万感の思いで賛美する啄木の思いが素直に表現されている。
- vi 石川啄木の二首めの短歌(□)には異郷にあつて言葉の悩みをもつ啄木の方言に対する劣等感と同時に憧憬が感じられる。

ア iとiv

イ iとv

ウ iとvi

エ iiとv

オ iiiとv

問五

傍線部③「深い愛惜の情が湧いて来た」とあるがそれはなぜか、その説明として最も適当なものを、次のア～オの内から一つ選べ。

- ア 経済的な効率を最優先にして台無しにされたかつての江戸の自然美を惜しみ懐かしむから。
- イ かつての江戸である東京を故郷とする者として昔の江戸が地方の田舎のように思えるから。
- ウ 疎開先がなくて困った両親とは違い戦争を経験していないので東京に対する愛着が深いから。
- エ 世界で最もひどい扱いを受けた都市に対してあわれみ惜しむ気持ちにわかに起きたから。
- オ 利益を追求して大規模に改造されてしまった現代の東京にもはや魅力がもてなくなったから。

問六 傍線部④「ひどい扱いを受けた都市はあるまい」とあるがなぜそのように言えるのか、説明として最も適当なものを、次のア～オの内から一つ選べ。

- ア 戦争により壊滅的に破壊された上にかつての都市美を懐かしむことが感傷的であるという理由で否定されたから。
- イ 長い歴史と伝統を破壊する効率主義的な都市開発が東京に対する愛情のない地方出身の政治家によって行われたから。
- ウ もともと美しい街ではなかった上に金儲けのために大改造されかつての伝統が障害物として壊されてしまったから。
- エ 江戸時代からの習慣で政治家の決定に反対することを苦手とする都民が政治家の暴走を止めることができなかったから。
- オ 東京を故郷とすることのない地方出身者が東京の人口の多数を占め東京の伝統がないがしろにされてしまったから。

問七 文章1と文章2についての生徒ア～生徒オの五人は各々二回の発言をしている。二回とも明らかに誤った発言をしている生徒を選べ。なお、正誤の判断は各々の生徒の発言の傍線部のみを判断すること。

生徒ア 文章1と2は内容的には同じテーマを論じている。文章2の言いたいことはよくわかるけど、文章1では「都市流民」という言葉が何の説明もなくいきなりでてきて文章全体がわかりにくくなっているね。

生徒イ しかし、自分が育った故郷がいつまでも変わらないでほしいという思いが文章1の筆者にはあるということとはたしかだ。

生徒ウ そういう思いのことを郷愁きょうしゅうというのかな、文章2の「私」も「都市流民」でありながら郷愁きょうしゅうの思いを抱いているわけだね。

生徒エ ところで、文章2の「私」は戦後大規模な都市改造を行った政治家や官僚を批判しているけど、結局それは自分たちの責任だと反省もしているね。

生徒オ それに対して、文章1の筆者は、故郷のよさを台無しにしたのは地元の人たちの責任だと主張しているね。

生徒ア つまりその意味では文章1と2は対照的だね。ちなみに文章2は「私」がタイムスリップするというストーリーで文章

の主張もまったく現実味がないといわざるを得ないと思う。

生徒イ それはさておき、故郷についてどういう思いを抱くかについて文章1の筆者と文章2の「私」は同じ立場にたつてい
ると言えそうだと。
へんび

生徒ウ ただ、文章1の筆者は若い時には辺鄙な自分の故郷にコンプレックスをもっていたようだよ。

生徒エ そうだね、時代的な背景としても成長と向上とがもてはやされた時期だとも言っているね。

生徒オ ただ、文章1の筆者も結論としては、変わらない故郷にあこがれている訳だし、この点で文章1と2は内容的に似通っ
ているね。

第二問 次の文章は、西加奈子『円卓』の一節である。公団住宅で三つ子の姉、両親、祖父母と暮らす渦原琴子は、小学三年生。周囲からは「こっこ」と呼ばれている。ある日、母親の妊娠を知らされて戸惑った琴子は、同じ公団住宅に暮らす幼馴染の「ぼっさん」に会いに行く。なお、出題の都合により、文章を一部改めている。

ぼっさんは、本当に、すぐに風呂から出てきた。

汗を流したところ悪いが、と断つて、こっこはぼっさんに、下まで降りてきてもらうことにした。

「ちよつとぼっさんに会うてくる。」

「えー、こっこ、もう遅いからやめとき。」

A
時計を見ると、八時半である。確かに、小学三年生ふたりが会うには、遅い時間かもしれない。こっこが乞うように石太（石）を見ると、意を酌んだ石太が、儂（わ）も行く、と言った。石太がいてくれれば安心だ。日常英会話事典を一冊携え、こっこと共に扉を開ける。

「もう夏やの。」

石太は、手をつないだり、大丈夫か、などと気遣ったり、とにかくこっこを子供扱いしない。こっこはそれを好ましいと思っており、今も、こっこが心配であるから付き添っているのだという雰囲気を微塵（B）も出さず、優雅に夏の気配を楽しんでいる。

外に出ると、ぼっさんが下に立っていた。石太を見ると、嬉しそうに笑った。ぼっさんは、石太のことを、限りなく寿老人（寿）に近い人物と思っており、だからこそ、大切なランドセルに「寿」の字を、石太に書いてもらったのだ。

「ぼっさんすまんの。風呂あがりに。」

「え、ええ。冬やと、な、難儀（なんぎ）やけどの。」

団地の前のベンチに腰掛け、だからと言って何を話すでもない。石太は街灯の明かりに日常英会話事典を広げる。

「こ、ことこんち、こ、子供出来るんやの。」

「せや。五つ上の兄さんから聞いたん？」

「ち、違う。ことこんちから、き、聞こえてきたんや。」

「阿呆ども、声大きいねん。」

「こ、公団中に、ひ、響いたかもしれんの。」

石太が開いたページには、「寿司 SUSHI」とあった。寿司は英語でも「スシ」なのだ。例文は「人々はすしづめになった。」 PEOPLE WERE PACKED IN LIKE SARDINES. スシはどこにもない。欧米人の気まぐれめ。

「うち、妹か弟が出来るねん。」

「め、めでたいやないか。」

「めでたいけ？」

①「そ、そうや。」

「なんでじゃ。」

「な、なんで、命、の誕生は、素晴らしいことや。」

「うちはどうせ命が誕生するんやったら、犬か猫がよかった。」

「そ、そうか。」

「犬や猫、この公団におけるうちは飼われへんと思つてたんや。それやのに、赤ちゃん出来るいうたら、あつさり引つ越す言いよんねん寛太。」

「うん。」

「引つ越すんやったら、赤ちゃんやのうて、犬や猫がいい。うちは、弟も、妹もいらん。」

「そ、そうか。」

「あれやで、うちが弟や妹にやきもちやいてるんちゃうか、て思うなや。違うねん。うちは全然、そんなんやのうて、妹も、弟も、いらんねん。嬉しくないねん。」

「う、嬉しくないのか。」

「嬉しくない。なんで家族がみんな、揃いもそろつて、あない阿呆みたいに喜ぶんか、うちにはわからんのじゃ。」

「う、嬉しなかったら、よ、喜ばんでも、ええ。」

「そうか。」

「^②そ、そうや。」

石太、ぼっさんを頼もしく思う。「頼もしい」は、「RELIABLE」だそうだ。「リライアブル」な、ぼっさんよ。

「ときどき、うちが言うことに、周りがおかしなることがある。」

「お、おかしなる？」

「うん。こっちはなんでそんな風なんやって、思われてる気がする。」

「そ、そうか。」

「今日もそうや。朴君注4のふせいみやく、うちは羨ましくて、だから、自分がふせいみやくになったのんが、嬉しかつてん。でも、ジビキ注5、あれは、怒つとつた。絶対。」

「そ、そやな。」

「せやろ？ なんで怒つてたんや。」

「こ、こことが不整脈違うのに、真似してそうしてる、と、お、思たんと違うか。」

「真似は、真似やった。だって、うち、朴君みたいに、死ぬかもしれへんとは、思わんかったから。でも、なんで怒るんか、分からん。」

「ふ、不整脈は、死ぬかもしれんお、思うほど、しんどいんやろ。それを、健康な、こことが、ま、真似することが、あかんと、思たんやろ。」

「健康やったら、真似したらあかんのけ。」

「く、苦しいのに、苦しいフリしたら、あかんのやないか。」

「なんでじゃ。」

「ば、馬鹿にしてるように、お、思う人も、おるからや。」

「馬鹿になんてしてへん。うちは、ほんまに、不整脈になりたいんや。」

「こ、ことこの気持ちは、分かる。お前は、ば、馬鹿にしてへん、て、お、俺やったら知ってる。でも、そ、そういう風に思てまう人も、

お、おるんや。あんとき、ぱ、朴君はおらんかったけど、め、目の前で、ここが、不整脈とち、違うのに、苦しい、真似しとつたら、ぱ、ぱ、朴君は、嫌な思いをしたかも、せーへん。」

「なんでじゃ。うちは、羨ましいから、やつてるのに。恰好ええ人の真似するのんが、あかんのけ。」

「お、お前は恰好ええ、と、お、思うかもしれへんけど、ふ、普通の人は思わへんのや。ふ、不整脈の人は、しんどいなあ、て、思てはるんや。」

「普通の人はそう思てはるかしらんけど、でも、うちは、恰好ええと、思うねん。」

「うん。」

「でも、あかんのんか。」

石太は、「恰好いい COOL」という言葉を探し当て、じっと、琴子とぼっさんの話を聞いている。相変わらず、月は白く、ソークルである。

「こ、こことい。」

「何。」

「む、昔、お前、お、俺の話し方、め、めっちゃ真似したこと、あつたやろ。」

「うん。」

「ほ、ほんで、先生に、めっちゃ、怒られとつたやろ。」

「うん。覚えてる。幼稚園の頃やろ。ぼっさんがどう思うと思うの、て、怒られた。」

「お、俺はな、お前が、こ、心から、俺、俺のことを、恰好ええと、お、思てくれとる、て、分かつて、それで、うれしかったんや。で、で、で、で、で。」

「うん。」

「そ、それは、お、俺がお前のこと、よう知つとるからであつて、な、やっぱり、真似するんは、ふ、普通は、あかん。」

「なんでじゃ。」

「お、俺の話し方はな、き、吃音^まいうてな、世の中では、あ、あかんことと、されてるからや。ふ、不整脈と一緒や。け、健康な人があかんことを、ま、真似するんは、あかん。馬鹿にしてると、お、お、思われるんや。」

「吃音は知つとる。ぼつさんが教えてくれたやろ。でも、なんであかんことなん。こんな格好ええやんか。」

「お、俺は、お前が、そ、そう言うてくれるから、じ、自分のこと、恰好ええって、思えるようになったんや。で、でも、それまでは、お親も、俺の、は、は、話し方を、な、治そうと必死やったし、人に、き、聞き返されるんが、嫌やった。」

「そうなんや。」

「そ、そうや。お、おかんも、俺のこと、可哀想に、て、思てはった。お、俺は、そういう風に思われるんが、い、嫌やった。」

「なんで嫌なん。可哀想って思われるのが、なんで嫌なん。」

「こ、ここ。それはな、お、お前が、可哀想、て思われることが、な、ないからや。」

「うちが？」

「そ、そうや。こ、ここは、可哀想に、て思われたことない、ないから、か可哀想って思われる人間の気持ちだが、分かんんや。」

「分かん。」

「お、怒ってるんと違うど。」

「分かつてる。ぼつさんは、怒ってるんやない。」

「こ、ここが、ほんまに、恰好ええと、お思てても、ほ、ほ、本人は、も、も、ものすごく嫌に思つてることも、あるねん。」

「香田^香めぐみさんも？」

「も、もらいものけ？」

「そうや。もらいものも、真似したらあかんのけ？」

「ま、真似したい、気持ちは、分かる。が、眼帯は、恰好ええから、の。」

「ジビキも怒らへん？」

「せ、せやなあ、怒らへんかもな。」

「ほんなら、なんで、不整脈は、怒るんや。」

「ふ、不整脈は、し、死ぬほどしんどいからやないか。も、もらいものは、し、し、死ぬほど、しんどくないから。」

「でも、ぼっさんも、死ぬほどしんどないやろ。」

「せ、せやな。」

「でも、真似したらあかんのやろ。」

「せ、せやな。」

「その違いがわからん。」

「む、難しいな。」

石太はもちろん、すでに「DIFFICULT」を探し当てている。今、とてもデイフィカルトな問題について、琴子とぼっさんは話し合っている。頭のいい子供は、素晴らしい、と石太は思う。

ぼっさんも、琴子も、考えている。

③ 石太は、その頭を、かじりたい。がりがりと咀嚼し、自分のものにした。自分が広げている書物より何より、有益で役に立たなくて立派で阿呆な事柄が、彼らの汗臭い頭に、詰まっているのだ。思いもよらないような、何かが。

「わ、わかった。ほ、本人が、それを、どれだけ嫌がってるかに、よるんと違うか。」

「でも、それどうやったら分かるん。本人が嫌がってるか、恰好ええと思ってるか。」

「そ、想像するしか、ないんや。」

そのとき、イマジン、と、石太が呟いた。日常英会話事典を開かなくても、イマジンは分かるのだ。

「いまじん?」

「想像する、の英語や。」

「ふうん。」

ぼっさん、寿老人を見る目で、石太を見た。石太はソークールである。もちろん、ぼっさんが「クール」を知る由もないが。

「ぼっさんに、琴子よ。」

石太の声は、風に吹かれても消えない。朗々とした美声である。

④「イマジンはな、年取ったらな、分かつてくることも、ある。」

「いまじんの意味？」

「違う。相手が、どう思うか、年取ったほうが、分かることもあるのや。琴子は、死ぬのんが怖くないやろう。」

「怖くない。全然。死にたい、と思うときがある。」

「そ、そうなんか。」

「そうや。だから、不整脈も、嫌なことやないねん。恰好ええねん。ポートピープルも、恰好ええ。あんな風に、死にたい。」

「ぼっさんは。」

「お、俺は怖い。し、死にたくない。」

「そうか、もしかしたら、琴子より、ぼっさんのほうが、イマジンかも、しれへんぞ。」

「死ぬのが怖いのが、いまじんなん。」

「死ぬのが怖いということは、生きることを大切にすることやろ。」

石太の口から零れる明朝は、周囲の音を奪う。

「琴子も、死ぬ怖さが分かったら、もしかしたら、もしかしたらや、分かるかもしれへん。相手がどう思うか。ポートピープルの人らが、どんな思いやったか。朴君が、どういう思いでおるか。」

「分かんかったら？　うちはあかん人け？」

「あかん人やない。でも、琴子がしんどい思いをするやろうし、それ以上に人にしんどい、つらい思いをさせるかもしれへん。」

「い、いまじんは、大切なんやの。」

⑤「僕はな、僕は、そう思う。ぼっさんと、琴子が、どう思うかは、お前らで、決めたらええ。ただ、自分が思って、言うたことに、責任を持たなあかん。」

「責任?」

「そうや。例えば、琴子が、ぼっさんの話し方を恰好ええと思たんやったら、その思いに、責任を持たなあかん。もしかしたら、そのことで、ぼっさんを傷つけることになるかもしれないけど、それは自分が、心から思ったことなんや、て、言わなあかん。堂々と、な。」

「分かった。」

石太は思う。きっと彼女の行く末は、なかなか、困難なものになるだろう。

「いまじん。」

こっこ、^{注10}ジャポニカは必要なさそうである。石太の「いまじん」は、それは美しく、^D凛として、こっこの汗臭い脳内で、光っているから。

注1 石太 琴子の祖父。

注2 寿老人 七福神の石柱。長寿の神。

注3 寛太 琴子の父親。

注4 朴君 琴子のクラスメイト。心臓が弱く、この日は学級会で発作を起こして倒れ、皆を慌てさせた。

注5 ジビキ 琴子の学級担任。

注6 吃音 話し言葉が滑らかに出ない発話障害の一つ。

注7 香田めぐみさん 琴子のクラスメイト。目の炎症（ものもらい）に罹って、しばらく眼帯をつけていた。

注8 ポートビープル（ポートピア） 紛争・圧政などで祖国を追われ、漁船やヨットなどに乗り、難民となって外国へ逃げ出した人々。琴子はクラスメイトのベトナム人「こっくん」からこの言葉を聞く。

注9 明朝 漢字や仮名の書体の一種。

注10 ジャポニカ 「ジャポニカ学習帳」の略。琴子がいつも持ち歩いており、気になった言葉を忘れないように書き留めている。

問一 二重傍線部A～Dの意味として最も適当なものをそれぞれ次から選べ。

A 意を酌んだ

ア 相手の立場を出来るかぎり尊重した

イ 相手の行動を読んで先回りした

ウ 相手の気持ちを好意的に推察した

エ 自分の労を惜しまずに

オ 自分の損得を考えずに

B 微塵も出さず

ア 自然と振る舞いながら

イ 表情に出すことなく

エ 少しも見せることなく

オ 少しだけ見せながら

ウ 努力して抑えながら

C 朗々とした

ア 大きな声ではつきりと

イ 小さな声でも堂々と

エ 静かな調子で厳かに

オ 若々しくはきはきと

ウ 明るい調子でのびのびと

D 凜として

ア 心を甘く溶かすように

イ 心を優しく癒すように

エ 心にしこりを残すように

オ 心にじわりと染み込むように

ウ 心に真つ直ぐ響くように

問二 傍線部①・②「そ、そうや」という言葉に込められた「ぼっさん」の心情として、最も適当なものを次から選べ。

ア ①では、琴子が弟妹の誕生を喜んでいないことに気づかず何とも思っていないかったが、②では、琴子が素直に祝福できない複雑さに気づき、慰めようとしている。

イ ①では、琴子が弟妹の誕生を喜んでいないことを不思議だと思っているが、②では、琴子が素直に祝福できないのをわがままだと思い、非難しようとしている。

ウ ①では、琴子が弟妹の誕生を喜んでいないのは間違ったことだと思っているが、②では、琴子が素直に祝福できない複雑な事情を聞き、深く同情している。

エ ①では、琴子に弟妹が出来ることを皆が祝福するのを特に疑問に思っていないが、②では、琴子が素直に祝福できない複雑な思いに共感し、味方になろうとしている。

オ ①では、琴子に弟妹が出来ることを皆が祝福するのを当然だと思っているが、②では、琴子が素直に祝福できない複雑な思いを理解し、受け止めようとしている。

問三 傍線部③「石太は、その頭を、かじりたい」とあるが、その心情を表す語として適当なものを次からすべて選べ。

ア 好奇心 イ 自負心 ウ 虚栄心 エ 感心 オ 慢心 カ 疑心 キ 安心

問四 傍線部④「イマジンはな、年取ったらな、分かってくることも、ある。」とあるが、ここで「石太」が子供たちに伝えようとしたことは何か。その説明として最も適当なものを次から選べ。

ア 今は正しく理解できなくても、他人の気持ちや経験していない事柄について、これから少しずつ理解しようと努めるべきだ、

と伝えようとした。

イ 今は上手く想像できなくても、他人の気持ちや経験していない事柄について、これから少しずつ分かっただけによいのだ、と伝えようとした。

ウ 今は必要だと感じなくても、多くの人と出会って様々な経験をする中で、だんだんと「イマジン」という言葉が役に立つようになるはずだ、と伝えようとした。

エ 今は言葉で説明できなくても、多くの人と出会って様々な経験をする中で、言葉は少しずつ自分のものになっていくのだ、と伝えようとした。

オ 今は自分の考えが正しいと思っても、多くの人と出会って様々な経験をする中で、自分の考えも少しずつ変わっていくものだ、と伝えようとした。

問五

傍線部⑤「責任を持たなあかん」と言った石太の心情として、最も適当なものを次から選べ。

ア 子どもたちの純粋さを大切にしたいという思いと、生きる上で必要な知恵を身につけてほしいという両方の思いを抱いている。

イ 子どもたちから親しみを持ってもらいたいという思いと、大人としての威厳を保ちたいという両方の思いを抱いている。

ウ 子どもたちの自由な発想を尊重したいという思いと、大人として教え導かなければならないという両方の思いを抱いている。

エ 子どもたちには自分の考えを大切にしてもらいたいという思いと、周囲の意見にも耳を傾けてほしいという両方の思いを抱いている。

オ 子どもたちにはいつまでも夢を持ち続けてほしいという思いと、現実にも少しずつ目を向けてほしいという両方の思いを抱いている。

第三問 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。ただし、作問の都合上、字句を改めたところがある。

何某村に昼、盗の入りしを、主人はるかに見て、棒を提げ其の跡を追ひ行き、^{注1}今市といふ町を過ぐるにも声をかけず、町を^{注2}町ばかりも過ぎて、待てよ盗人、町を過ぐる時声をかけなば、若き者どもの棒ちぎり木にて馳せ集まり、汝を害せんも計りがたし。こゝにて呼びかけしは汝を助くる一計なり。盗みし物をことごとく返さば²外に望みはなし。いかにいかにと近寄りしに、盗人、土に手をつき詫び言して、取りしものはことごとく返して去りけるが、其の後一年ばかり過ぎて、この盗人、筑紫の方より帰りぬとて、よ^{注6}脇差一腰を持て来たりて、「過ぎし昼盗して許されし命の恩を報いん」と言ひしかば、主人、「汝が物を取らんとならば、其の時^{注7}其のままにて帰さんや」と叱りたれば、盗人³涙をおとして辞し去りぬとぞ。

管茶山『筆のすさび』「盗を逐ふに心得べきこと」より

注1 今市……栃木県中部にあった市。

注2 一町……長さの単位。約一〇〇メートル。

注3 棒ちぎり木……護身用の棒。

注4 計りがたし……どうしてやることもできない。

注5 筑紫……現在の福岡県西部にあたる。

注6 脇差一腰……腰の脇に差す小型の刀一本。

注7 其の時其のままにて帰さんや……お前が盗みを働いた時、そのままお前を帰さなかつたらう。

注8 辞す……やめる。

問一 傍線部①「今市といふ町を過ぐるにも声をかけず」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次のうちから選び記号で答えなさい。

ア 盗人が一人で盗みに入るのは初めての経験だったため、怖じ気づいてしまったから。

イ 盗人が被害を受けた村の若者たちに仕返しされないように、主人が配慮したから。

ウ 盗人は村の若者たちにはれずに盗みを働くように、主人に指示されていたから。

エ 主人は弟子である盗人がうまく盗みを遂行できるかどうか心配だったから。

オ 主人は盗人を成敗するためには他の町の若い衆の助けを借りる必要があったから。

問二 本文には、主人の台詞に鈎括弧かぎかっこがついていない箇所がある。その範囲の始めと終わりの三文字を、それぞれ抜き出しなさい。

問三 傍線部②「外に望みはなし」とあるが、これはどういうことを言っているのか。最も適当なものを次のうちから選び記号で答えなさい。

ア 盗人として生きるには、良心を捨てるしかないのだということ。

イ 盗人としての資質がないため、仲間とは認められないということ。

ウ 罪を犯した以上、謝罪したとしても許すつもりはないということ。

エ 盗んだものを返すのならば、罪には問わないでやるということ。

オ 過去の盗品を差し出すのなら、今回は見逃してやるということ。

問四 傍線部③「涙をおとして」とあるが、このときの「涙」とはどのようなものか。最も適当なものを次のうちから選び記号で答えなさい。

- ア 自分の罪の重さを初めて自覚した盗人の涙。
- イ 盗人が改心したことを確信し安堵した主人の涙。
- ウ 主人の清廉潔白な言動に深く感動した盗人の涙。
- エ 私利私欲にとらわれた盗人を哀れむ主人の涙。
- オ 主人の信頼を取り戻せずうちひしがれる盗人の涙。